

『大谷女子大國文』『大阪大谷國文』総目録

(凡例)

・本誌に掲載した論文および寄稿文を収録した。その寄稿文は、本学科に在職された先生方の退職・古稀・逝去等にさいし執筆されたものである。なお「献呈の辞」や「あとがき」の類は採録しなかつた。

・論文名の配列は雑誌掲載時の順序に従つた。

・大谷女子大学から大阪大谷大学への校名変更に伴い、当学会は大谷女子大学日本語日本文学会から大阪大谷大学日本語日本文学会となり、あわせて雑誌名を改称した。創刊号から第三十六号が『大谷女子大國文』、第三十七号以降が『大阪大谷國文』である。

創刊号 (昭和四十六年三月)

創刊の辞

花の呪—その文学伝承化する途—

定家の歌における現実の影

—「駒とめて……」の歌をめぐつて—

乗岡 憲正

乗岡 憲正

佐藤美知子

『萬葉集』における語法についての一考察

—「磯の知らなく」をめぐつて—

「富士の人穴草子」の形成

樋口一葉の女性観

第二号 (昭和四十七年二月)

パロディの世紀

—十七世紀日本文学の側面—

俊成女と定家—歌詞の相関をめぐつて—

大伴家持における“生”と“死”

『靈異記』説話の伝承伝播の諸問題

—海人教化説話を中心に—

平家物語における成親説話の形成

第三号 (昭和四十八年三月)

浦島子古伝覚書

宣長学の思惟構造—「道」をめぐつて—

山上憶良論

—「貧窮問答歌」についての一考察—

「かげろふ日記」について

刈屋 博美

西野登志子

仲尾さつき

今 栄蔵

山口 達子

市田佳世子

正野 光子

松浪 久子

中村 宗彦

小椋 嶺一

楠本富美子

—語彙の統計的考察と文体—

「紫式部集」二類本の性格

—詞書の改筆と意図—

兄アキラとともに

三上先生の憶い出

故三上章教授を偲ぶ

三上章博士追悼

雪の日

三上章先生略年譜

三上章先生著作目録

#### 第四号（昭和四十九年三月）

続・季節文学の発生序説

—「春秋の定め」を中心に—

堀辰雄 参考文献目録・補遺

平安朝文学における語彙について

—「もの」複合形容詞について—

『俊成卿女家集』の諸本について

—「三手・桃園・蓬左文庫本の性格—

昔話「牛の嫁入」の一考察

菊地 明子

瀬田 初美

三上 茂子

橘 茂

原田 芳起

乗岡 憲正

松岡 裕子

—中世説話・物語との交渉を通して—

#### 第五号（昭和五十年五月）

「日本靈異記」の訓釈の性格

萬葉集の「うたがたも」について

萬葉集巻五の冒頭部について

—旅人・憶良の歌文—

翁歌考—季節文学における—

文選訓より見たる類聚名義抄

平松家本平家物語にみる宛字・誤字・脱字・衍字

宗因俳諧論序説—《軽口》と《寓言》—

秋成「血かたびら」考

—『老子』的思惟について—

立原道造と音楽（覚書）

現代詩初頭の動向

萬葉長歌の構成について

接続詞—上代・中古文学における—

「建礼門院右京大夫集」の作者について

—「重家朝臣家歌合」の右京大夫とは別人か—

森 光代

遠藤 嘉基

大坪 併治

佐藤美知子

乗岡 憲正

中村 宗彦

山内 潤三

山内 潤三

乾 裕幸

小椋 嶺一

小久保 実

山本 捨三

緒方 鈴子

野手 和子

福原あつ子

福原あつ子

〔随想〕わたしの経歴

関戸 秀規

—わたしの周辺・わたしの歩んできた道— 遠藤 嘉基

堀 辰雄 参考文献目録・補遺(二)

三昧院本『日本靈異記』を通してみた上代特

小久保 実

殊仮名遣について

『とはずがたり』の夢

山田富佐子

〔研究ノート〕訓読語と和文脈の語

岩本 博江

—「すでに」と「はやく」—

村上 久子

第六号 (昭和五十一年四月)

〔日本書紀〕における『時』の接続用法

中村 宗彦

徒然草の文体と思想

山内 潤三

上田秋成の思维方法の特質

小椋 嶺一

—『莊子』齊物論の視点から—

大山 明子

平安日記文学における思考・心情の動きの特異性

大山 明子

—接続助詞を中心にした文章構成—

高杉 恵子

延慶本「平家物語」小考

高杉 恵子

—その存在意義について—

廣比美和子

〔徒然草〕各段の接続関係について

廣比美和子

説話の叙述形式として見た助動詞キ・ケリ

野田美津子

—今昔物語を中心に— 大坪 併治

野田美津子

〔あさまし〕の語義分化とその変遷について

猪坂由紀子

—中古・中世における—

猪坂由紀子

藤原有家論

茶田 智子

第七号 (昭和五十二年三月)

〔季節文学の発生〕再論

乗岡 憲止

—“花と雪と”の文学伝承—

乗岡 憲止

〔風土記〕札記

中村 宗彦

—訓詁の再検と山川原野名号所由考—

中村 宗彦

第九号 (昭和五十四年三月)

来迎院本『日本靈異記』序文の訓釈について

遠藤 嘉基

阿形本『大毗盧遮那経義釈』の訓点

大坪 併治

『古事記序文』 試解―「以注明」を中心に― 中村 宗彦

『萬葉集』 卷一・二の論―目錄に関連して― 佐藤美知子

勅修仏教学会の講師と弁官 溯江 文也

『御堂閔白記』の引用形式 穂田 定樹

『源氏物語』と調度 玉上 琢弥

〈言寿ぎ〉の説話的考察 乗岡 憲正

中野莊次氏旧蔵本『横笛草子』の性格について 岩瀬 博

『高野山通念集』考 山内 潤三

『続虚栗』考―貞享期蕉風俳諧の姿勢― 石川 真弘

『住替る代ぞ』と『行秋ぞ』と 富山 奏

―『おくのほそ道』寸見(四)― 小椋 嶺一

『青頭巾』と『二世の縁』―秋成凝視の一点― 横山 正

浄瑠璃操芝居における民俗芸能性の変貌 和田繁二郎

―『道中大楽安平記』の紹介― 入江 春行

小室案外堂『新編大和錦』と『夢恋恋』 山本 捨三

新詩社と九州 玉村 文郎

西脇順三郎の詩と詩論の原点 岩井美揮子

日本語と中国語における音象徴語 佐々木恵弥子

『日本霊異記』における上代特殊仮名遣について 増井 庸子

『源氏物語』明石の上論 池田 政美

―その「さいはひ人」説をめぐる― 伊庭美代子

藤原良経論 原田三枝子

瞽女唄「俊徳丸」の研究 紅露恵利子

岡本かの子における〈生命〉についての一考察 新田谷祐巳子

岡本かの子の小説の文体について 北川 典子

―林芙美子との比較― 遠藤 嘉基

〔随想〕わたしの生涯 佐藤美知子

第十号(昭和五十五年三月) 小椋 嶺一

持統天皇行幸関係歌の背景 佐藤美知子

―主として紀伊・伊勢・参河の場合― 小椋 嶺一

秋成「魔仏一如観」の系譜 和田繁二郎

小室案外堂『自由艶舌女文章』 石井 勝子

『萬葉集』における歌論的要素 増井 庸子

院政初期における助動詞タリ・リの文体論的考察 増井 庸子

―『今昔物語』を中心に― 増井 庸子

岩井美揮子 佐々木恵弥子 増井 庸子

増井 庸子

『平家物語』における感動表現について

— 感動詞を中心に —

神谷 悦子

『風立ちぬ』論

— 「風立ちぬ、いざ生きめやも」について — 谷口 直子

第十一号 (昭和五十六年三月)

『色葉字類抄』補訂試稿

— 文選出典訓を中心に —

中村 宗彦

『孤松』をめぐって

— 『野ざらし紀行』の作風に及ぶ —

石川 真弘

〃語りもの〃 文芸の伝承要素

— 「菅原伝授手習鑑」の民俗 —

乗岡 憲正

『源氏物語』に於ける「后がね」教育

— 上代・中古文学に表われた「紫」 —

島田とよ子

『紫式部日記』の自己投影

— 『今昔物語』における受身と使役の助動詞の

川口 恵美

文体論的考察

— 狂言綺語および狂言綺語観について

山下 裕美

— 一葉『十三夜』の構想

— 録之助の形象をめぐって —

茶田 雅子

鳥羽 京子

第十二号 (昭和五十七年三月)

『萬葉集』における国守の歌 (一)

— 「天離る鄙に五年」について —

佐藤美知子

中島敦『山月記』論

— 「ひかりかくれたまひにし後」 — 後編の世界 —

入江 春行

「明石の君像」形成過程の考察

— 受領の娘の夢 — 源氏物語の結びの一つ —

長野まり子

『今昔物語』の係助詞ゾ・ナム・コソの文体論的考察

— 井上 章子 —

新本 順子

説話文学に見える弘法大師の書

— 軍記物における〈なのり〉の考察

稲垣佳世子

— 独歩『酒中日記』論

西本 祐子

第十三号 (昭和五十八年二月)

立原道造の抒情詩の方法その他

— 北原白秋の詩に用ゐられた擬声語

吉見谷真知子

『萬葉集』における国守の歌 (二)

— 豊前守宇努首男人の歌をめぐって —

山本 捨三

『万葉集』の問答歌 (一)

— 六条河原院札記

大坪 併治

— 坂本 信幸

玉上 琢彌

卷名「蓬生」

境田喜美子

『源氏物語』に於ける「中宮」

島田とよ子

『雲州往来（明衡往来）』と『文選』との関わり寸見

三保 忠夫

仮名文献における振漢字の諸問題

— 大谷女子大学蔵本『秋月』翻刻にあたって —

山内 潤三

『野ざらし紀行』における杜牧「早行」詩の引用について

山内 春夫

成美俳諧の性格

花圃・その文学以前について

石川 真弘

「吹」と「ふく」—和習の背景—

和田繁二郎

打消の助動詞の性格をめぐって

大谷 雅夫

「新生」論

松田（野村）剛史

論「風立ちぬ」と『優しき歌』について

神野由佳里

— 立原道造の昭和十三年 —

長野まり子

上代・中古文学における“香り”の系譜

昆布 操子

— その呪性 —

山本日登美

朱雀院の涙

— 形式名詞の用法をめぐって —

味村 明美

紀海音の擬声語について

山本 絹代

山本捨三先生の略歴並びに業績

第十四号（昭和五十九年三月）

『今昔物語集』巻五「国王入山狩鹿見鹿母夫人為后語第

五」出典考

大坪 併治

『萬葉集』の雅宴歌

— 主として巻六・一〇一六番歌について — 佐藤美知子

和歌の用語と文体及びその解釈

— 『古今和歌集』と『伊勢物語』とについて —

竹岡 正夫

「六条院」推定復原図并考証

玉上 琢弥

式部卿の宮の不幸—親王と政權—

島田とよ子

「御成敗式目」古註における諸家の訓説について

三保 忠夫

幸若舞曲の和歌（その一）

岩瀬 博

成美私見—一茶との関係を通して—

石川 真弘

中島湘煙の小説

和田繁二郎

— 「伯爵の令嬢」「一沈一浮」「花子の嘆き」 —

帰省小説の出現とその背景

—宮崎湖処子『帰省』論—

北野 昭彦

日露戦争期における詩壇の雰囲気について

入江 春行

「ト、テ、タラ」について

松田(野村) 剛史

杜牧の「杜秋娘詩」について

山内 春夫

『古今和歌集』の編纂意識

平川 治子

「この世はかばかり」—紫の上の(すくせ)—

長野まり子

「女絵」考

新本 順子

歌人「高橋虫麻呂」の叙事と抒情

吉田 昌美

斎宮と祭祀—その女帝的性格—

藤井美貴乃

「若紫」の巻

—若草の君の幼さと藤壺との関連について—高田 順子

院政期における接統詞の文体論的考察

半田 貴子 秦 啓子 石田 知子

『猿蓑』考

稲垣多佐子

森鷗外『雁』

宮本 裕子

大坪併治先生の略歴並びに業績

—巻四、四九二〜四九五の場合—

坂本 信幸

「て」、連用形、「と」の分布

松田 剛史

明石中宮—光源氏崩後—

島田とよ子

「かぎりなき心ざしといふとも」

—六条の院の姫君—

長野まり子

物語文学にみる「月」の信仰

山田 玉美

『今昔物語集』における形式名詞コトの文体論的考察

下田由佳子

森鷗外『青年』論

妻鹿 紀子

第十六号(昭和六十一年三月)

花圃「萩桔梗」試論

和田繁二郎

入水説話考—「大山守の命」の歌謡を中心に

聖武天皇宸翰『雑集』の考察

乗岡 憲正

—その写書状況と憶良の影—

藤原実頼の娘たち

佐藤美知子

藤原明衡論考

島田とよ子

『やうきひ物語』と『長恨歌絵巻』

—江戸時代前期における絵巻製作の一樣相—小林 健二

言水編『前後園』をめぐる

石川 真弘

第十五号(昭和六十年三月)  
万葉四首歌拾遺

『けいせい請状』の方法

— 演劇的趣向を中心として—

宮崎湖処子「村落小記」再見

「坊つちゃん」について

中島敦『季陵』論

「谷崎源氏」をめぐる思い出（上）

受身文の「によって」

彼我の文学に見る「風花」について

石中死人歌論

— 長歌構成面から見た特徴と位置付け—

福嶋仁美（旧姓有高）

二条の院、東の院、そして六条の院

長野まり子

家持と越中歌壇

福田 敬子

処女塚伝承の考察—隠み妻論—

家治久美子

源氏物語の服制と年代—紫から黒へ—

藤田 佳子

助詞「の」の「拘ふ」の用法についての学説史

— 『手爾葉大概抄』から『てにをは係辞弁』まで—

角田 裕美

夏目漱石『明暗』論

原 陸美

和田繁二郎先生の略歴並びに業績

第十七号（昭和六十一年十二月）

『雲州往来』享禄本語彙調査

小説の中の文法—時制を中心に—

「谷崎源氏」をめぐる思い出（中）

「さがなさま、母」たち

— 前編の世界における「非光る源氏系」の不幸—

宇治十帖の「霧」と「水」

長野まり子

花と『源氏物語』—その民俗伝承—

田名網博子

太宰治『バンドラの匣』考

伊藤 優美

弔辞

瀬尾 晶子

父正夫の思い出

小川 修三

竹岡正夫先生に捧ぐ

竹岡 俊樹

竹岡正夫先生を偲んで

大坪 併治

竹岡正夫先生追悼号刊行に際して

田中貴恵子（旧姓岩本）

竹岡正夫先生略譜

乘岡 憲正

竹岡正夫先生著作目録

第十八号（昭和六十三年三月）

「谷崎源氏」をめぐる思い出（下）

「谷崎源氏」をめぐる思い出（下）

玉上 琢弥

三保 忠夫

松田 剛史

玉上 琢弥

〈誣ひ語り〉から〈物語〉へ

—「崇り」の文芸への試論—

『枕草子』注釈稿(一)

人物とことばの対応

—源氏物語の一つの試み—

更級日記にみえる作者の実母の問題を解く

舘子入内について—花山院と頼忠—

幸若舞曲「敦盛」考(上)—継承と創造—

大方家所蔵文献資料調査覚書(一)

—『和州布留大明神御縁起』『大念仏寺旧記』—

興福寺関係連歌年表(稿)—紹巴時代—

『好色一代男』の「はなし」

—「リアリズム」のテキスト分析—

「短歌研究」休刊前後

条件文の解釈をめぐる

中国の詩に見る「蒼梧の雲」について

『源氏物語』の主題

宇治十帖の「網代」

自註に於ける虚構について

—心敬の『源氏物語』本説展開—

鏡の能としての(松浦之能)

—世阿弥作能の軌跡として—

『笈の小文』の俳諧姿勢

「銀河鉄道の夜」論

玉上琢弥先生の略歴並びに業績

第十九号(平成元年三月)

幸若舞曲「敦盛」考(下)—継承と創造—

ワニとサメをめぐる

藤原伊尹の娘達について

狩野文庫蔵紹巴母追善千句(翻刻)

梧桐日本琴一面の歌について

末摘花論—その「山の神」的性格—

紫の上の魅力—嫉妬・自立—

「三四郎」論—里見美禰子の人物像—

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

—初期形と最終形をめぐる問題—

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

乗岡 憲正

福嶋 昭治

境田喜美子

大橋 清秀

島田とよ子

岩瀬 博

小林 健二

石川 真弘

中嶋 隆

入江 春行

松田 剛史

山内 春夫

長野まり子

田名網博子

中林 円

高田 直子

島田みずほ

阿部 桂子

岩瀬 博

岩野 靖則

島田とよ子

中林 円

久郷めぐみ

壺内 美佳

森田 有香

菊地 可純

久寿米木和子

—〔星祭〕の再検討から生き死にの問題まで—

青木 理恵

谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」論

小川 典子

第二十号（平成二年三月）

『萬葉集』に見る香葉類の歌（一）

—主として卷十六の歌について—

佐藤美知子

『北長家騷記』について

高橋 圭一

『源氏物語』における「とぶらひ」考

西 いおり

紫の上の呼び名と地位の変化

榎本 博美

『好色五人女』考

—卷二「情を入し樽屋物がたり」を中心として—

高見 純代

宇和島方言「ヨル」「トル」について

田中 美佐

第二十一号（平成三年三月）

憶良の仏教語—「泥洹」について—

佐藤美知子

独歩「武蔵野」成立の歴史性

—新しい自然の発見と表現—

北野 昭彦

「女生徒」覚え書

村橋 春洋

西鶴の書簡文学に関する一考察

山本 亜樹

第二十二号（平成四年三月）

「湘南（瀟湘）」考

—文学作品と宋迪の八景図—

山内 春夫

夏侯玄の「楽毅論」について

福嶋 昇

劉知幾の息子たち（上）

福島 正

太伴家持の「願寿作歌」をめぐる

佐藤美知子

湯の原に鳴く葦鶴は

—『萬葉集』卷六、九六一番歌をめぐる—鈴木 利一

紅葉降るやど

—古今集時代における「長恨歌」享受の一端—三木 雅博

継子譚文芸の成立

—その王朝文学との関わり— 乗岡 憲正

『新撰和歌』考—四季の巻の構成について—

阪口 和子

「山鹿物語」の語り物的性格

—文体の考察を通して— 小林 健二

「浄瑠璃坂仇討」の実録

高橋 圭一

蘇峰の文学論と独歩の「武蔵野」

—新しい自然文学の提唱と創始— 北野 昭彦

『大東亜戦争歌集』前後

—「戦時歌壇史」の一章—

入江 春行

御伽草子『あきみち』の素姓  
杉江斎喜三と大納言四辻季遠

松浪 久子

中世語二題

—〔1〕サウカウ、〔2〕ようふう—

鈴木 博

—「葉種いろは抄」の伝授を巡って—  
映画になった「女殺油地獄」  
放蕩息子—上方狂詩一斑—

小林 健二

安部公房「壁—S・カルマ氏の犯罪」論

植松 美奈

浄瑠璃『祇園女御九重錦』に見える歌謡  
続・独歩「武蔵野」成立の歴史性

高橋 圭一

山内春夫先生の略歴並びに業績

第二十三号 (平成五年三月)

“語る”文学伝承における〈罪と懺悔〉の意識

—その“芸能伝承”との関わり—

乗岡 憲正

『三体詩素隠抄』小考

鈴木 博

『萬葉集』に見る香葉類の歌(二)

—憶良の「秋野花」の歌について—

佐藤美知子

『萬葉集』における色彩相と表現

橋本 京子

「尾上」という場所—一つ松考序説—

宸翰本和泉式部集について

永池 健二

—主として「緑」と「瑞祥」との関連表現について—

福島 正

忠平の禁色聴許の時期について

—宇多法皇と忠平—

阪口 和子

谷崎潤一郎『卍』論

澤田 早代

『北野天神縁起』の方法

—『保元物語』『平家物語』成立論序説—

島田とよ子

—「硯わり」に関する一考察—  
—広島大学本成立を中心に—

谷口 典子

小男の変貌

—『小男の草子』から『一寸法師』へ—

福田 晃

—「河童」論—  
乗岡憲正先生の略歴並びに業績

久野 尚美

第二十四号 (平成六年三月)

もし一皮むくならば (口演速記)

隼人の瀬戸の巖も

龜井 孝

―「ものさとし」終息の論理―  
福山藩の能楽

浅尾 広良

―『福山語伝記』収載記事をめぐって―

小林 健二  
森崎 光子

上司小剣「天満宮」論

岩瀬 博

―『中』の用法について

岩野 靖則

祭祀・祭事を語る民間説話

『夕日』二則 (後)

森 博行

―沖縄県与那国島の事例―

中島敦「牛人」論

島田 徳子

意味からみた語形成 (一)

安部公房「デンドロカカリヤ」論

栗山 博子

―形容詞と動詞の交渉―

大槻美智子

第二十五号 (平成七年三月)

久遠寺蔵『本朝文粹』に於ける訓読符に就いて

―その施された背景に着目して―

宇都宮啓吾

―久遠寺本を手懸かりとして―

宇都宮啓吾

『類聚万葉拔書』について

阪口 和子

中国老虎譚

森 博行

三代目中村鴈治郎が語る「上方歌舞伎の世界」

私注 佐藤 彰

『萬葉集』に於ける女性に対する表現

佐藤 彰

近野 葉子

―「白」の表現をめぐって―

池田 緑

『悟浄歎異』論

近野 葉子

入江春行先生の略歴並びに業績

第二十六号 (平成八年三月)

近代日本女性の歩み

入江 春行

第二十七号 (平成九年三月)

薄雲巻の天変

入江 春行

鳴く鹿と散る萩と―大宰帥大伴御歌二首―  
空白のモダリティ―連体形終止の上代―

鈴木 利一  
川端 善明

意味からみた語形成 (二)

— 形容詞の意味と動詞派生 — 大槻美智子

詞における構成 — 韋莊「謁金門」詞試釈 — 森 博行

『源氏物語』における「闇」の表現性 杉谷まりえ

— 藤原兼輔の歌を中心として —

第二十八号 (平成十年三月)

坂上郎女試論

— 尼理願死去挽歌と祭神歌について — 佐藤美知子

遣唐使に贈る歌 鈴木 利一

— 卷九、一七九〇、一七九二について —

「河内の大橋を独り去く娘子を見る歌」について

坂本 信幸

鏡王女をめぐる相聞 村田右富実

藤原敦隆の『万葉集』享受 阪口 和子

— 『類聚古集』の部類を通して —

朱雀院の出家 浅尾 広良

— 「西山なる御寺」仁和寺准拠の意味 —

五節の舞の起源譚と源氏物語

— をとめごが袖ふる山 — 新聞 一美

楽の音と歌声をめぐる小考

— 中国文学の受容と古代和歌の領域の拡大 — 三木 雅博

「舞の本」の挿絵の展開 小林 健二

影絵人形芝居と舞台

— マレーシアの舞台バンクンを中心に — 佐藤 彰

『武道伝来記』私論

— 卷五—三「不断に心懸の早馬」 — 高橋 圭一

「二元描写」論を視点論として読む

— 木村毅『小説研究十六講』をヒントに — 北野 昭彦

「藪の中」論—虚構の時空— 村橋 春洋

瀧口修造の言葉と物 東 典幸

智光『浄名玄論略述』に引く『玉篇』の佚文について

井野口 孝

他動詞「死ス」の表現性

— 文脈的あるいはボイス的に — 大槻美智子

「咲」字と「サク」訓との対応関係の定着について

— 『万葉集』訓読との関わり — 宇都宮啓吾

韋莊「清平樂」詞について 森 博行

林羅山に於ける杜牧の詠史詩 山内 春夫

『史記』と『資治通鑑』 福島 正

岡本かの子「河明り」論

『美しい星』論

佐藤美知子先生の略歴並びに業績

中尾 千草

米谷 良恵

御伽草子『清水冠者物語』の一考察

和田 京子

第三十一号（平成十三年三月）

『摂州東成郡阿倍権現縁記』

— 解題・翻刻・影印 —

小林 健二

物語の連結 神話の力

— 『古事記』垂仁天皇条覚書 —

藤原 茂樹

葵巻の物の怪攷 — 「名立つ」六条御息所 —

浅尾 広良

聖教調査におけるデータ化について（二）

夏目漱石『夢十夜』（第二夜）

東 典幸

— L A T E X 2<sub>ε</sub>を用いた組版の問題 —

宇都宮啓吾

談話構造に言及するメタ言語表現の役割と獲得過程

樋口 裕子

杜牧と汪遵 — 息夫人詩をめぐって —

森 博行

藤壺の宮の心象表現

樋口 裕子

応答詞「いい・よろしい・結構」の意味論と語用論

大槻美智子

— 憂し・心憂しを中心として —

巽 美希

第三十二号（平成十四年三月）

元結と邵雍 — 地上の仙界をめぐって（二） —

森 博行

第三十号（平成十二年三月）

岩瀬 博

略語と語種

萩原朔太郎「青猫以後」の風景

東 典幸

— 若者言葉の略語とその位置づけ —

大槻美智子

— 『定本青猫』の挿絵から —

東 典幸

「杜子春」の研究史ノート

村橋 春洋

岡本かの子「家霊」論

東 典幸

児童はデイベート授業をどう捉えるか

村橋 春洋

— いのちが呼応する場所 —

中尾 千草

— デイベート教材の開発とその検証を目指して —

樋口 裕子

絵巻の牛飼童

松本麻衣子

樋口 裕子

第三十三号 (平成十五年三月)

沈んだ島―大分県瓜生島伝説を中心に―

岩瀬 博

狂言《八尾》の筋立ての源流

小林 健二

吉原幸子論―光る傷―

東 典幸

司馬光・邵雍交遊録(前)

森 博行

冷泉家時雨亭文庫蔵『新撰髓腦 別本』

―翻刻と考察―

阪口 和子

語種と略語―補説―

大槻美智子

第三十四号 (平成十六年三月)

司馬光・邵雍交遊録(中)

森 博行

タドル・ツタウ・ツタワル

―人・物の移動と対象としての場―

大槻美智子

窪田般彌論

東 典幸

『源氏物語』における喪服の描写方法

山西 陽子

〔書評〕佐藤美知子著『萬葉集と中国文学受容の世界』

鈴木 利一

「タカクナル・タカマル」

―形容詞と派生動詞の意味―

大槻美智子

高野山金剛峯寺蔵(金銀字一切経)『仏説

六字神咒王経』院政期点について

宇都宮啓吾

第三十六号 (平成十八年三月)

二点間の距離量を表す形容詞と動詞化

大槻美智子

埴谷雄高『死霊』第一章

―人間と精神病院から―

東 典幸

司馬光・邵雍交遊録(下の下)

森 博行

話し合い能力と論理的能力に対するデイバー

ト授業の効果

樋口 裕子

第三十七号 (平成十九年三月)

講演録 通俗的妖怪と近代的怪異

京極 夏彦

拾遺抄の万葉歌

阪口 和子

血脈資料『諸嗣宗脈紀』について

―龍谷大学本を手懸かりとしたその成立と

データ公開を巡る問題―

宇都宮啓吾

第三十五号 (平成十七年三月)

司馬光・邵雍交遊録(下の上)

『丹後国風土記』逸文「奈具社」条収載歌考

森 博行

—「天の原振りさけ見れば」と漢語「仰天」—

鈴木 利一

教育の重要性

樋口 裕子

后腹内親王藤壺の入内

— 皇統の血の高貴性と「妃の宮」—

浅尾 広良

第三十九号（平成二十一年三月）

『長谷寺験記』と興福寺  
為信集注釈（四）

横田 隆志

近世芸能における鈴木三郎異伝の展開

— 能・狂言、山伏神楽・番楽—

小林 健二

翻刻・林屋正蔵作『復讐鶉権兵衛物語』

笹川 博司  
小島 文子

吉本隆明『言語にとつて美とはなにか』

— 二種類の自己表出と指示表出—

東 典幸

第四十号（平成二十二年三月）

講演録 小説ができるまで

有栖川有栖

— 雍陶「崔少府が池鷺」詩に対する『素隠抄』  
の解釈をめぐって—

森 博行

川上未映子『ヘヴン』

鈴木 利一

貫之の和歌における独自性

— 様々な表現を通して—

村井 梨恵

— 私的感覚・私的体験の擁護—  
〈研究余滴〉『更級日記』「みつさかの山」考  
〈研究余滴〉道徳坊中 第一の家

東 典幸  
宇都宮啓吾

第三十八号（平成二十年三月）

那古寺所蔵の奈良写経について

宇都宮啓吾

日本語母語話者の議論過程における共話的特  
徴とその役割

森 博行  
樋口 裕子

近世芸能における鈴木三郎異伝の展開（続）

— 古浄瑠璃など—

小林 健二

第四十一号（平成二十三年三月）

実録の中の木村重成

高橋 圭一

未通女らが織る黄葉

未通女らが織る黄葉

留学生に対するビジネス場面を意識した敬語

未通女らが織る黄葉

—『萬葉集』卷八「秋雜歌」一五二番歌の表現—

紫式部集注釈(一) 鈴木 利一  
笹川 博司

「資料紹介」天理大学附属天理図書館蔵『泊瀬深秘之事』

横田 隆志

東浩紀『クオントラム・ファミリーズ』

東 典幸

—投瓶通信からのアプローチ—

—外国籍児童を対象としたJSL算数教育における数詞の扱い方—

樋口 裕子

#### 第四十二号(平成二十四年三月)

紫式部集注釈(二)

長谷寺大念仏衆の動向

翻刻・京都大学附属図書館蔵(大物本)『兵家茶話』上

横田 隆志

詩仙堂の邵雍—丈山と羅山—

高橋 圭一  
森 博行

「注文の多い料理店」小考

—「数量詞+も+仮定節」「数量詞+だけ」の表現性から—

大槻美智子

#### 第四十三号(平成二十五年三月)

訓点から見た坂東本『教行信証』の一側面  
踏歌後宴の弓の結 宇都宮啓吾

—『源氏物語』花宴卷「藤の宴」攷—

長谷観音台座石伝承の展開 浅尾 広良  
横田 隆志

紫式部集注釈(三) 笹川 博司

#### 第四十四号(平成二十六年三月)

「楞陰雜語」随想—柿本人麻呂と邵雍— 森 博行

朱雀帝御代の始まり 浅尾 広良

—葵卷前の空白の時間と五壇の御修法—

久安六年本『三國祖師影』の訓点について 宇都宮啓吾

—池上阿闍梨点を巡る一問題— 横田 隆志

長谷寺周辺の石と神々 東 典幸

中原中也「サーカス」—茶色い戦争— 笹川 博司

紫式部集注釈(四) 大阪大谷大学図書館蔵『平家物語』古写本について 四重田陽美

「算数」の授業における手掛かりとしてのファイラー

—非母語話者の談話理解のために— 樋口 裕子

第四十五号 (平成二十七年三月)

国冬本少女卷朱雀院行幸の独自異文

浅尾 広良

「寶石」との邂逅

—長谷観音台座石の実見記録と説話—

横田 隆志

『詩經』にみる味覚と美味の表現

稲垣 裕史

夏目漱石『こゝろ』

—先生とK、ニーチェ、単独性—

東 典幸

黒川本紫日記簡注 (一)

笹川 博司

第四十六号 (平成二十八年三月)

海原の上に波なさきそね

—大伴家持防人歌群「無題三首」考—

鈴木 利一

鎌倉時代の長谷詣と作善・小考

—藤原実重「作善日記」を素材として—

横田 隆志

『楚辭』の飲食行為と匂い

—「二招」の分析に先立って—

稲垣 裕史

夏目漱石『こゝろ』—明治の精神—

東 典幸

黒川本紫日記簡注 (二)

笹川 博司

大阪大谷大学図書館所蔵『平家物語』古写本について②

四重田陽美

第四十七号 (平成二十九年三月)

大原野に野行幸する冷泉帝

浅尾 広良

—桓武から醍醐、さらに『源氏物語』へ—

夏目漱石『こゝろ』—「私」の「真面目」—

東 典幸

『楚辭』「招魂」「大招」にみる美味の快楽

稲垣 裕史

黒川本紫日記簡注 (三)

笹川 博司

第四十八号 (平成三十年三月)

天平勝宝四年二月二日に聞く歌

鈴木 利一

—壬申年の乱平定以後之歌二首—

澁澤龍彦『高丘親王航海記』

—エロティシズムの構造とアナクロニズム—

東 典幸

黒川本紫日記簡注 (四)

笹川 博司

外国人児童生徒に対する日本語指導等の教育支援の現状

樋口 裕子

夏目漱石「草枕」

東 典幸

第四十九号 (平成三十一年三月)

—断片化された顔・神曲・婆子焼庵—

東 典幸

黒川本紫日記簡注 (五)

笹川 博司

大阪大谷大学図書館所蔵『平家物語』古写本について③

四重田陽美

第五十号（令和二年三月）

創刊五十年記念特輯号刊行の辞

浅尾 広良

天地と 共に久しく

— 卷四、五七八 大伴三依「悲別歌」をめぐって —

鈴木 利一

「宿世とをかりけるを」攷

— 河内本から見た『源氏物語』 —

浅尾 広良

黒川本紫日記簡注（一六）

笹川 博司

藁しべ長者と虻

— 『今昔物語集』卷十六第28話を読む（二） —

横田 隆志

『平家物語』における那須与一の人物像の形成

四重田陽美

『高野物語』の歴史認識と作者説

— 北条泰時と醍醐天皇を中心に —

大坪 亮介

摘録 大阪大谷大学蔵『岩渕夜話』

高橋 圭一

保田與重郎の萩原朔太郎論

— 酣燈社文庫『萩原朔太郎詩抄』 —

東 典幸

那古寺蔵「繡字法華経」について

— 書芸文化の一形態とその伝来を巡って —

宇都宮啓吾

教えない授業 — 「漢文」による主権者教育 —

稲垣 裕史

本学の司書課程について

木下みゆき

「研究ノート」形容詞述語文の過去形が完了事態の

評価を表す時

— その条件と表現性 —

大槻美智子

初級日本語授業における授業構造の境界の示し方

— 日本語教育実習生の課題を解決するために —

樋口 裕子

志学台の思い出

大谷 雅夫

大谷時代を振り返って

小林 健二

追想『大谷女子大國文』

阪口 和子

「宝石」の思い出

中嶋 隆

懐かしき大谷女子大学

森 博行

研究姿勢の転機

浅尾 広良

一九九七年の「国文学科」

東 典幸

大阪大谷大学食堂研究（抄）

稲垣 裕史

思い出 — 通信端末風味で —

宇都宮啓吾

大阪大谷大学に着任して

断章

学生達が連れて行ってくれる場所

私の訪書旅行

日本語教育コースの歩み

『大阪大谷国文』五〇号に思う

温かく、時に熱く

今もむかしも好きな場所

日文と私

よく覚えておくことって？

国文学科の思い出

日本語日本文学科（旧国文学科）半世紀の歩み

日本語日本文学科（旧国文学科）年表

『大谷女子大國文』『大阪大谷國文』総目録

大坪 亮介

笹川 博司

鈴木 利一

高橋 圭一

樋口 裕子

四重田陽美

横田 隆志

池田 千尋

柴田 裕太

中池佐和子

箱崎 和代